

# 形成・再建

科目責任者 朝戸裕貴  
学年・学期 4学年・前期

## I. 前文

形成外科学とは外科学の一分野であり、体表あるいは体表に近い身体各部の先天的および後天的疾患による変形に対して、おもに手術的治療によって形態と機能の修復をはかることを目的とする。その対象は幅広く、他の科と連携して行う再建外科や、形態改善に特化した美容外科も形成外科学の重要な一分野である。形成外科学がどのような疾患を対象とするのか、またそれぞれの疾患を治療するに当たりどのような基本知識が必要となるのかを中心に解説する。

## II. 担当教員

朝戸裕貴（形成外科学）  
梅川浩平（形成外科学）  
藤澤大輔（形成外科学）  
倉林孝之（形成外科学）  
今西理也（形成外科学）  
鈴木康俊（埼玉医療センター形成外科）

## III. 一般学習目標

形成外科の治療法の基本的概念、および形成外科が対象とする疾患について理解する。

## IV. 学修の到達目標

口唇口蓋裂や小耳症など形成外科学分野における先天性体表異常疾患について説明できる。

熱傷・顔面や手の外傷・腫瘍切除後の組織欠損、顔面神経麻痺など形成外科学分野における後天性疾患について説明できる。

創傷治癒の基本を理解し、難治性潰瘍やケロイドなどの病態について説明できる。

植皮術・皮弁移植術・マイクロサージャリーなど形成外科の手術手技の基本について説明できる。

## V. 授業計画及び方法

回数	月	日	曜日	時限	講義テーマ	担当者
1	6	8	月	1	形成外科学概論（1）	形成外科学 朝戸裕貴
2		8	月	2	形成外科学概論（2）	形成外科学 朝戸裕貴
3		16	火	1	口唇口蓋裂と顔面形成外科	形成外科学 朝戸裕貴
4		16	火	2	外傷・熱傷	埼玉医療センター 形成外科 鈴木康俊
5		19	金	1	創傷治癒と難治性潰瘍、瘢痕とケロイド	形成外科学 梅川浩平
6		19	金	2	植皮と皮弁、マイクロサージャリー	形成外科学 今西理也
7		24	水	1	頭頸部再建外科	形成外科学 倉林孝之
8		24	水	2	乳房再建、がんの再建外科治療	形成外科学 藤澤大輔

回数	月	日	曜日	時限	講 義 テ ー マ	担 当 者
9	6	25	木	1	顔面神経麻痺	形成外科学 朝 戸 裕 貴
10		25	木	2	小耳症の形成外科的治療	形成外科学 朝 戸 裕 貴

#### VI. 評価基準（成績評価の方法・基準）

講義への出席状況と定期試験の成績により総合的に評価する。

#### VII. 教科書・参考図書・AV資料

標準形成外科学 第7版 医学書院

TEXT 形成外科学 第3版 南山堂

小耳症・外耳道閉鎖に対する機能と形態の再建 金原出版

#### VIII. 質問への対応方法

随時受け付ける。ただし事前に秘書を通じアポイントをとること。

原則として試験日の1週間前からは受け付けない。

## IX. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目の関連

\*◎：最も重点を置くDP ○：重点を置くDP

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）		
医学知識	人体の構造と機能、種々の疾患の原因や病態などに関する正しい知識に基づいて臨床推論を行い、他者に説明することができる。	○
	種々の疾患の診断や治療、予防について原理や特徴を含めて理解し、他者に説明することができる。	○
臨床能力	卒後臨床研修において求められる診療技能を身に付け、正しく実践することができる。	
	医療安全や感染防止に配慮した診療を実践することができる。	
プロフェッショナリズム	医師としての良識と倫理観を身に付け、患者やその家族に対して誠意と思いやりのある医療を実践することができる。	○
	医師としてのコミュニケーション能力と協調性を身に付け、患者やその家族、あるいは他の医療従事者と適切な人間関係を構築することができる。	◎
能動的学修能力	医師としての内発的モチベーションに基づいて自己研鑽や生涯学修に努めることができる。	
	書籍や種々の資料、情報通信技術（ICT）などの利用法を理解し、自らの学修に活用することができる。	
リサーチ・マインド	最新の医学情報や医療技術に関心を持ち、専門的議論に参加することができる。	
	自らも医学や医療の進歩に寄与しようとする意欲を持ち、実践することができる。	
社会的視野	保健医療行政の動向や医師に対する社会ニーズを理解し、自らの行動に反映させることができる。	
	医学や医療をグローバルな視点で捉える国際性を身に付け、自らの行動に反映させることができる。	
人間性	医師に求められる幅広い教養を身に付け、他者との関係においてそれを活かすことができる。	
	多様な価値観に対応できる豊かな人間性を身に付け、他者との関係においてそれを活かすことができる。	

## X. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

各講義の最後に小テストを行う。

テストの内容について講義の中で講評と解説を行う。

## XI. 求められる事前学習、事後学習

シラバス別冊に記載。なお、シラバス別冊に記載が無い場合、要点を確認しておくこと。（所要時間の目安20分）

## XII. コアカリ記号・番号

シラバス別冊に記載。なお、シラバス別冊に記載が無い場合、要点を確認しておくこと。（所要時間の目安20分）